教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　渡　邉　順　一
編　集　広　報　部

もくじ

◎会長あいさつ …… 1
◎県教頭会・全国の動き
　定期総会・講演会 …… 2
　全公教総会・研究部長会 …… 3
◎全国研究大会（滋賀大会） …… 4・5
◎特色ある学校 …… 6
◎地区だより …… 7
◎ひろば・編集後記 …… 8

会長あいさつ

令和を迎えて

宇都宮市立陽南中学校　渡　邉　順　一

平成31年度が令和元年度と元号が変わりすでに半年が過ぎようとしています。今年の夏も異常気象なのか冷夏から酷暑に変わり、仕事をしていても体調管理に苦労しました。栃木県公立小中学校教頭会会員の皆様はどのように今年度の半年を過ごされたでしょうか。

さて、来年度小学校、再来年度中学校で全面実施される「新学習指導要領」に向けて、各学校における教育改革が進んでいると思います。「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業改革、学校の組織的実践力を改善し、受け身ではない子供たちを育成するための「カリキュラムマネジメント」の概念に基づいた実践等が求められています。日々の学習を、いかに学習者本位のものにするかという大きな課題に向けてのスタートがすぐそこまで来ています。

また、地域社会との連携が強く求められてもいます。コミュニティ・スクールや地域協議会といった形で、多くの学校が地域とのつながりを持っています。しかし、人間関係の希薄化や学校の統廃合などが進みこれまでの連携を見直さざるを得ない地域もあります。学校と地域との Win－Win の関係づくりに連携担当の育成を担う副校長・教頭の役割は一層大きくなってくることと思われます。

一方、学校の働き方改革については、各学校努力されてはいると思いますが、悩んだり、あきらめたりされている事もあるのではないでしょうか。勤務時間の適正化、部活動の在り方、地域との連携等々、要求されている事、取り組むべき事は山のようにあります。それら各々のことにその場で、その都度向き合っていたのでは、本当の意味での改革にならないと考えます。私見ですが、一つの考え方として、原点回帰があると考えます。学校教育の原点とは何か。私は、「授業」と「児童生徒と向き合う」事ではないかと考えます。授業とは言うまでもなく教材研究と授業実践。児童生徒と向き合うとは、一人一人の子供と人間関係を醸成する時間の確保。この二つを確実に実践するために、今まで学校という組織が抱え込んでしまったしがらみを解いてくことが学校における働き方改革ではないでしょうか。もちろん、それに加えて私たち教職員の「子供のためだから」やっていい、やらせていいという考えについても意識改革を行わなければなりません。そうでなくては、昨今、日本最大のブラック企業と呼ばれ、教員採用試験の受験者数が減っている教育界の現状も何も変わらないと思います。

チーム学校の司令塔としてこれまで以上に教職員の組織化を図り、学校全体の力量を向上させ、課題の解決に向かうため、私たち副校長、教頭に課せられる課題と期待は膨らむばかりです。小さな事からでもかまいません。実行できる事からしていきましょう。困ったときには、お隣の学校の副校長・教頭と会員同士、愚痴や、本音を話しても良いと思います。本当に学校の働き方改革が進んだと感じるのは、副校長・教頭に余裕ができた時なのかもしれません。

県 教 頭 会 の 動 き

県教頭会定期総会に参加して（議事録署名）

那須塩原市立大原間小学校　阿　部　将　宏

議事録署名を仰せつかった時は、「書類を見て、名前を書けばよいのだろう」という程度に考えていました。しかし、当日実際に総会に出席してみると、参加人数が多く、組織も確立されており、それに基づいた活動が丁寧になされていることを肌で感じました。

総会は議長さんの丁寧な進行のもと、議事がスムーズに進み、議案はすべて可決されました。総会終了後、私ともう一名の議事録署名人は控室に出向き議事録の内容を確認の上、署名捺印をしました。

私は、教頭に成り立てで、職務に追われる日々を送っていますが、諸先輩方が築いてきたこの教頭会の趣旨を理解できるよう、精進していきたいと思います。最後に役員の皆様、お疲れ様でした。そしてこれからもよろしくお願いします。

講演会を聴いて思うこと

那須塩原市立東原小学校　鍋　谷　政　善

「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」とても興味深い講演テーマであった。認知能力とは、テスト等で測られる「知識」の部分。一方、それで測ることができない「ちから」が非認知能力といえる。この非認知能力は、いろいろなメディアでも話題になっている。

新学習指導要領においても、非認知能力（学びに向かう力や人間性等）が示された。その実施に向け、各校では、様々な計画と準備が進んでいる。本市においても、これからの社会が求める資質・能力を日常の授業の中で育てるため、教師の授業観の転換を図る目的で平成27年度より、「なすしおばら学び創造プロジェクト」を立ち上げ、市内全小・中学校で取り組んできている。

「非認知能力を子供たちに育むために何が必要なのか？」という観点から講演を聴かせていただいた。そこで、「非認知能力」とはどのような能力なのかということを理解した上で、私たち教員に求められる能力は二つあると考える。

一つ目は、子供たちの活動（プロセス）の中で、非認知能力を「見取る力」であろうと思う。見取ることができなければ、その力を共有したり、曖昧に自覚している力を賞賛したり、自覚していないが持っている能力の認識を促したり、否定的に自覚していることを肯定的な認識へ転換させたりすることが難しくなるからである。

二つ目は、豊かな学びにつなげるため、意図的なしかけを構想する力「構想力」であろうと思う。子供たちが、体験や活動に自発的に参加し、主体的に参画し、他者と協働することでその大切さを認識していくからである。

私たちは、新学習指導要領実施に向け、この２つの能力をより高めていく必要があると思う。では、何をすべきなのか。思うに、一人一人が、学習指導要領改訂の趣旨を十分に理解し、今までの授業イメージをリセットし、新たな授業をデザインしていくという意識改革を図ることなのではないだろうか。教育計画の段階から意識し、授業改善の方策を意図的に取り入れることで、毎日の授業実践をしていく中で見えてくることも多いと思う。

全　国　の　動　き

全国公立学校教頭会第61回定期総会に参加して

宇都宮市立陽光小学校　石　渡　美　穂

令和元年６月７日㈮に開催された「全国公立学校教頭会定期総会」に参加してきました。

総会が始まり、国歌斉唱、会長挨拶、来賓祝辞と会が進み、議事に入りました。昨年度の各ブロックや各専門部の活動経過・決算等の報告や、それらの議事に聞き入る全国の先生方の姿を目の当たりしているうちに、今さらではありますが、本会の活動がいかに充実したものであるかが分かりました。今年度、私が所属する「総務・調査部」の活動についても、「学校教育の水準を維持・向上させるために、必要な教育諸条件の整備・充実を求める要請活動」や「副校長・教頭の社会的地位とその職能の向上をめざすとともに、職能研修団体としての政策提言能力を高めるため、会員及び教育現場の現状や実態を的確に把握する調査の実施」など様々な役割を担い、年間をとおして組織的に活動していることが分かりました。私の中で、ぼやけていた輪郭がくっきりしてくるとともに、身が引き締まる思いがしました。午後は、文部科学省学校業務改善アドバイザーの妹尾昌俊氏の「失敗、反省から学ぶ、学校の働き方改革　管理職の役割はどこにあるのか」を演題とした講演を拝聴しました。以前にも妹尾氏の講演に参加する機会があり、教職員の働き方に関して多くの視点やヒントをいただいたので、今回もとても楽しみにしていました。講演の中で「働き方改革　５つの大まちがい」として「『児童・生徒のため』ならば多少遅くなっても仕方ないと、安易に例外を認める」こと、「残業時間といった結果だけを追い求めるあまり、虚偽申告や持ち帰りの仕事の増加などが起こり、かえって『残業の見えない化』が加速する」ことなどが挙げられていました。示された内容に納得し、働き方改革推進への決意を新たにすることができました。

最後に、今年度、全国公立学校教頭会の専門部員として活動する機会を得たことをチャンスと捉え、各県の先生方と協力しながら役目を果たしていきたいと思っています。

全国公立学校教頭会研究部長会に参加して

宇都宮市立清原中央小学校　松　原　伸　夫

去る７月４日、５日に第１回研究部長会が開催されました。１日目は、「ＥＳＤ：学習指導要領が求める日本の学び」と題して、日本ＥＳＤ学会副会長、前江東区立八名川小学校長の手島利夫氏を講師に、講話と演習による研修が行われました。未来を生きる子供たちには、持続可能な社会の創り手となることが求められており、必要な資質・能力として、「問題に気付き、情報を集め、判断し、問題の解決に向かって学び続ける力や、実践に向かって多様な人々と協働し実行する力等」が具体的に示されています。その資質・能力の育成に向け、教科横断的な視点から教育課程を編成すること（カリキュラム・マネジメント）、探究的・問題解決的な学び（主体的・対話的で深い学び）へと授業を改善することが重要であると再確認しました。

２日目は、全国滋賀大会及び次年度の岡山大会に係る趣旨説明と実践状況についての報告がありました。いずれも、次年度からの３か年の研究期間である第12期の研究テーマ「未来を生きる力を育む　魅力ある学校づくり」を意識した取組でありました。また、後半は、研究の進捗状況等についてブロックごとに情報交換を行いました。関東甲信越ブロックでは、「副校長・教頭の働き方改革を推進する中、如何に会員の主体的な研究を維持、継続するか」が話題の中心となり、思い切った業務の削減は不可欠であるとの共通認識をもちました。県の研究においても、課題について協働的に研究を進める一方で、「働き方改革」の取組についても情報を共有し、日々の業務改善に生かしていきたいものと感じているところです。

全国研究大会（滋賀大会）

大会に参加して（シンポジウム）

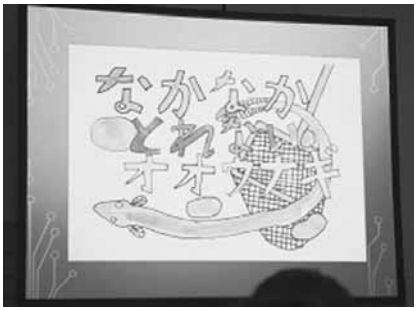
宇都宮市立城山西小学校　保　田　方　美

琵琶湖の畔滋賀県大津市にて、７月31日～８月２日に約2,700名が参加して、第61回全国公立学校教頭会研究大会が開催された。琵琶湖の水質保全の取組を積極的に行ってきた強みを生かして、「身近な環境との関わりを通じ持続可能な社会の担い手となる子供の育成」をサブテーマとし、未来社会を主体的に生き抜く自立した子供を育てるため、実り多きものとしてほしいとの主催者の挨拶で開会した。

その後のシンポジウムでは、コーディネーターの小林圭介氏（滋賀県立大学名誉教授）より環境分野からの生態系の持続可能性について、自然のもつ極めて多様な価値をできるだけ生かすような人間活動の在り方を模索する「自然と人間との新しい共生」を基本に置くことについて提言が示された。

シンポジストの３名からは、オプテックスグループの小林徹氏より、主催する琵琶湖環境体験学習から多様性を認める、挑戦できる、広い視野をもつなどの大切さについて、絵本作家の今関信子氏からは、小学校と連携した手作り紙芝居の実践を通した体験活動の有効性について発言された。また教職員生涯福祉財団専務理事の勝山浩司氏は「豊かな体験は子供たちにどのような影響があるのか」という観点から、体験がこれからの社会を生きるために必要となる確かな学力、豊かな心、健やかな体の総合力つまり「生きる力」となると論じられていた。

最後に他者・社会・自然環境との関係性を認識し「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むためにも、地域・企業・行政・学校が協働できるようなきっかけを作ることが我々教頭・副校長に求められていると助言をいただいた。



【手作りの紙芝居】

記念講演「琵琶湖水系の美しい自然」を聴いて

上三川町立北小学校　小　塙　真　穂

講師の今森光彦氏は、滋賀県大津市出身の写真家。琵琶湖を臨む田園風景の中にアトリエを構え活動し、自然と人との関わりを「里山」という空間概念で追い続けている。一方、熱帯雨林から砂漠まで、地球上の辺境地の取材を続けている。

今回の講演は、今森氏の琵琶湖に対する想いと、これからの子供たちに環境を守る理念と知識を持ってほしいという気持ちが伝わってくる内容で、大変感銘を受けた。

今森氏が子供の頃は、鮒が琵琶湖から田んぼへ上ってきて、田んぼで数百匹も鮒が捕れたそうである。しかし、琵琶湖改造計画が進められてからは、琵琶湖⇒川⇒田んぼが繋がっているという当たり前のことが、知られなくなってしまったのだという。

また、今森氏は幼少期から昆虫が好きで、昆虫の採集から飼育の仕方そして生態系へと理解を深めて来られて、多くの本も出版されている。昆虫に関する催しで出会う最近の子供たちは、カブト虫の名前を全部言えても雑木林を知らない、と残念そうに語っていた。そして、教頭である私たちに「環境を理解する気持ちは子供の頃に養われる。是非、自然と人とが共存していけるように子供たちを導いてほしい。」と強く願われていた。

講演の後半は、今森氏が40年かけて撮影された琵琶湖の写真を約50枚見せてくださった。「母なる琵琶湖を撮るには勇気が必要であったが、自分が琵琶湖に対して何を想っているのかを表現していきたい。」と講演を締めくくった。

特別分科会Ⅰに参加して

那須烏山市立荒川小学校　長谷川　友　美

特別分科会Ⅰでは「時宜に応じた課題」として、２名の講師から講演をいただき、協議を進めました。午前の部では「カリキュラム・マネジメントを通しての学校教育改善について」と題して、信濃教育会会長　後藤正幸氏の講演をいただきました。長野県の教育といえば、伊那小学校の総合的な学習の時間の実践が真っ先に思い浮かびますが、現在でも「児童中心のカリキュラム」を主軸として、課題解決と体験を大切にした様々な実践が行われているとのことです。毎年「全県研究大会」が開かれ、ここでは挙手制で研究授業を行うなど、熱意あふれる研修ぶりが伝わってきました。

午後の部では「麹町中学校の学校改革と副校長の役割」と題して、前副校長の宮森巖氏から講演をいただきました。宮森氏は、有名な工藤勇一校長の下、全員担任制や定期テスト・宿題の廃止、一流の方々を招いての授業やアフタースクール、さらに部活動をＰＴＡ組織に位置付けるなど、数々の先進的な改革に取り組まれました。その根底にあるものは、教育目標「自律・尊重・創造」です。新しい取組をする上でも、必ずこの教育目標に合致しているかに立ち戻るそうです。グループ協議では、カリキュラムや学校改革、働き方改革が話題になりました。これらを進めるにあたっては、講演でも強調されていた「どんな子供に育てたいか」が鍵になると感じました。分科会で受けた大きな刺激をこれからに生かしたいと思います。

全国公立学校教頭会研究大会に参加して

栃木市立小野寺北小学校　中　田　伸　幸

２日目特別分科会Ⅱでは、大きなテーマが環境教育で、講演１は、「環境に主体的に関わる力を育むフローティングスクール学習」～びわ湖や郷土について学び、考え、伝え合い、びわ湖と自分のつながりを見つめる子の育成を目指して～をテーマにして、滋賀県立びわ湖フローティングスクール所長である小野澤稔香先生よりお話をいただき「環境教育の展開・推進を目指し身近な環境に主体的に関わろうとする子供を育むために教頭としてどのように関わるのか」を協議の柱としました。講演２は「ヨシいけドンドン作戦による琵琶湖の環境保全活動と環境教育」をテーマにして、公益財団法人淡海環境保全財団専門員である田井中文彦先生よりお話をいただき「環境教育・環境保全の展開・推進を目指し保護者や地域の方と連携していくために教頭としてどのように関わるのか」を協議の柱として、グループ協議を行いました。

まず、滋賀県の琵琶湖を柱とした環境教育の取組に対して、先進的で素晴らしいと思いました。フローティングスクール学習とは、県内の全小学５年生が、学習船で１泊２日の宿泊学習を行いながら、環境について学ぶ取組でした。ヨシいけドンドン作戦とは、子を中心に保護者・地域と連携して、琵琶湖湖畔に以前のヨシ原の復活を試みる取組でした。

グループ協議では、全国各地、学校の規模も様々な先生方と話をすることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。その中で「入り口が環境教育でなくても、地域と繋がった学習をしていくことで、環境学習につながるのではないか。そのようにコーディネートしていくのが、教頭としての役割ではないか。」という意見も出ました。

地域をつなぐ小規模特認校制度

栃木市立大宮南小学校　佐々木　　敦

本校は、緑豊かな田園風景の中にある小さな学校です。栃木市教育委員会の指定を受け「小規模特認校」として今年で７年目を迎えました。小規模特認校は市内全域から児童を受け入れることのできる学校です。この制度によって、一時は55名にまで減少した児童数が、今年度は73名になり、現在は４割強の児童が学区外から通っています。

さて、「小規模特認校制度を取り入れたら児童数が増えました」みたいに書きましたが、実際は少しだけ違います。本校には小規模特認校のよさや特色を広く認知していただく活動が必須であり、７年目の今年もそれは変わりません。本校をアピールする機会は何度かありますが、特に年に２回のオープンスクールは重要で、教務主任を中心に職員全体で工夫をこらしています。過去には作家のドリアン助川先生を招いて本格的な朗読を聞かせていただいたり、プロのアナウンサーの方に話し方を教えていただいたりしました。昨年は、キャリア教育の一つとしてピザ職人世界チャンピオンをお招きし、ピザ生地が宙に舞い上がるのを見て大いに盛り上がりました。本校の児童にとって「本物」を体験する絶好の機会になりました。

また、地域との連携も欠かせません。一学期の終業式に行われる「ひまわり祭り」は、子供たち同士が一学期の成果を発表し、努力を認め合う行事です。この行事のお楽しみの一つは、地域のボランティアが作ってくれるかき氷です。写真は、そのひまわり祭りの一コマです。

小規模特認校制度は職員にとって、保護者にとって、地域にとってほんの少し特別な制度ですが、一方でそれぞれの心をつなぎ地域をつなぐ制度です。本校は小さいけれど、地域に根付いた学校を目指して今日も元気に歩みを続けています。

地域とともにある学校

さくら市立熟田小学校　青　木　律　子

本校には、今年で第21回を迎える、地域の有志プロジェクトＳＳによる「星空映画会」という夏の風物詩があります。

この会は、地元消防団の見守りの中、スタッフの方々が蒸したジャガイモを片手に、子供から大人まで世代を越えて、夏の星空の下で、校庭の大型スクリーンに映る映画を鑑賞する行事です。子供たちや地域の方々にとって、「明日から夏休み」「今年もこの時季がやって来た」という、夏の到来を告げる一大イベントとなっています。

この企画に携わるプロジェクトＳＳのメンバーは、田植え、稲刈り、花壇づくり、裁縫など、伝統ある学校行事や体験学習など、子供たちや学校の強い味方にもなってくださっています。

本校は、創立147年を迎える、農村地域の中の学校で、地域住民からの関心も高く、「学校のために」「子供たちのために」と惜しみなく支援をいただく機会が多くあります。令和元年度からは、学校運営協議会がスタートし、「子供たちのよりよい成長のために学校と家庭、地域住民が協働する」主旨に基づき、さらなる協力と協働を推進しているところです。

このような地域の伝統的な行事やふれあいの場を通して、子供たちが地域住民に愛されていることを自覚し、生涯にわたって地域を愛せる子供たちに育つことを願っています。

また、本校の教育活動も公開しながら、さらに地域の方々に学校を理解していただき、子供たちのために協働していただけるような学校づくりに努めていきたいと思います。

上都賀地区小中学校教頭会第11期の取組

上都賀地区小中学校教頭会会長　名　塚　久　貴

上都賀地区小中学校教頭会は鹿沼市、日光市の小学校50校、中学校25校、会員数76名で組織されています。

本会では第11期の全国公立学校教頭会統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」を研究主題とし、平成29年度から令和元年度までの３年間、小学校部会と中学校部会に分かれて研究を進めてきました。

小学校部会では、「施設・設備および事務に関する課題」の中で「ＩＣＴ機器の有効利用における教頭の役割－楽しい授業・ゆとりある校務運営をめざして－」を研究テーマとしました。１年目は現状把握とＩＣＴ機器の有効活用事例の調査、２年目は実践の紹介・取組の改善と評価、３年目の今年は研究の総括を行います。

中学校部会では、「組織・運営に関する課題」の中で「学校組織の有機的な運営をめざす体制づくり」を研究テーマとしました。１年目は異校種連携の事例調査、２年目は特色ある異校種連携を通した副校長・教頭の役割の検討、３年目の今年は人材育成や組織力の向上についてまとめます。

昨年度は小中学校ともに関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会の分科会において発表を行いました。その後、地区研修会でも再度発表し、小中学校の研究の相互理解を深めることができました。今年度は第11期のまとめを行い、来年度から始まる第12期の研究に向けての準備も進めていきます。

今後も教頭の資質向上と働きやすい職場環境の構築を目指して各校の研究を進めていきたいと考えています。

関ブロ栃木大会での発表

教頭としての４関与を意識した教職員への関わり

足利市立小中学校教頭会会長　神　林　孝　文

足利市の教頭会は、小学校22校と中学校11校合わせて33校の教頭33名で組織されています。

本会では、研究テーマ「組織・運営の活性化に係る教頭の役割」とし、今年度で３年目の研究になります。学校の現状や課題に基づき、組織・運営を活性化させるためには、○教職員の指導力の向上○協働性の向上○意欲の向上の３つの視点から学校の取り組むべき課題を明らかにし、本地区教頭会が継続して研究を進めてきた「教頭としての４関与」（知的関与、情的関与、働的関与、物的関与）を意識しながら教職員に関わっていくことで、組織力の向上と活性化を図っています。

教頭としての4関与とは、以下のとおりです。

ア　知的関与（方向性の指導）：組織が活性化し効果的に機能するよう方向性や取組内容について、提案や指導助言を行うとともに、各種研究大会への参加の奨励、資料等の情報提供に努める。

イ　情的関与（共感的理解、受容的な態度）：教職員一人一人の立場や考え方、思いや悩み等を共感的に理解し、長期的な展望の中で支え励ますように努める。

ウ　働的関与（共に働く）：事前研修や研究協議に参加したり、教職員の一人として様々な教育活動に携わったりするとともに、関係機関等との連絡調整に努める。

エ　物的関与（条件整備）：教育活動に必要な予算の立案及び予算執行を行うとともに、施設・設備の整備や調整、会場の確保等に努める。

以上の研究を、昨年度の関ブロ栃木大会にて、２か年の実践と評価・改善点などについて発表しました。今年度は３年目として、11月の県公立小中学校教頭会研究大会に向けて課題の吟味・まとめ、成果等を整理しているところです。

ひ　ろ　ば

プロフェッショナル

宇都宮市立岡本北小学校　皆　川　美弥子

サザンオールスターズのライブチケットが手に入り、所沢のドームへ出かけた。中学の頃、「勝手にシンドバッド」に衝撃を受けて以来、大学時代はサザンのコピーバンドを組み、社会人になってからも折に触れ、桑田さんの歌声に酔いしれている。そのサザンの40周年記念ライブである。

メンバーは皆、還歴を過ぎている。ところが年齢を感じさせない、というより、年齢を重ねたからこその圧巻のステージであった。３時間半ほぼノンストップで全36曲。桑田さんの歌声は途中で嗄れることもなく、最後まで伸びやかで力強く「桑田佳佑って、抜群に歌が上手いな」など、今更ながらに思ってしまった。いや、「上手い」だけでは成り立たない。３時間半、クオリティを保って歌い続けるために、どれほど鍛えているのだろう。その努力は凄まじいものに違いない。そして努力など感じさせない軽いトーク。これぞプロフェッショナルである。

また、先日、彼がラジオ番組で「なかなか納得できず、新曲完成まで何か月もかかってしまった」旨を語っているのを聞いた。40年間で何百曲も作っていて未だ「なかなか納得できない」とは。

プロフェッショナルとは、「その道に長けている人」ではなく、「満足することなくよりよいものを求めて努力し続ける人」なのであろう。

未来を想像して、未来を創造して

宇都宮市立清原中学校　金　橋　由美子

「人生100年時代」、今の私の人生は、折り返した位の道程にある。「予測が困難な時代」と言うが少し未来を想像してみようと思う。

2018年、出生率が1.42人と前年度を下回った。また、ＮＨＫ「日本人の意識」調査では「結婚は必ずしも必要ないと考える」回答が68％、「必ずしも子どもをもたなくてもよい」が60％と過去最高値となった。しかし、生き方や価値観の多様性を認める現代社会では結婚や出産は人生の必須条件ではないはずで、家族の在り方も変化している。さらに、2045年問題として人工知能が人間の脳を超えるという映画のような予想が現実化する頃、私は80歳代。そう言えば、8050問題より深刻なのは9060問題で、これも他人事ではない。

人々が生きやすく・暮らしやすい社会の担い手として、私は「健康寿命」を延ばす努力をしていきたい。心身の健康は、食生活を自己管理して、サボり気味のジム通いも続けることで効果を実感できるだろう。職務上の「人・先・場」を読む経験は物事への柔軟な対応力を高め、解決策を工夫するアイディアと心の余裕を生み出す。想像力は創造力につながるのだ。今後も社会の変化に上手に適応しながら、100歳で健康な自分を想像し、「人・物・時間」を大切に生きていこうと思う。

夏のひととき

佐野市立下彦間小学校　増　田　玲　子

みなさんは、夏休みというと何が楽しみですか。

自分が子供の頃は、とにかくプールで泳ぐことが楽しみだった。近所の友達と一緒に学校に行き、毎日のようにプールに入って真っ黒に日焼けし、それが健康のシンボルのようだった。子供会の旅行で行った阿字ヶ浦への海水浴は、さらに大きな楽しみで、泳ぐことは勿論、岩場でのカニ取りやイソギンチャク探しも忘れられない思い出である。

今から20年以上前に、私が勤務している町では、小学６年生を対象に伊豆大島で海の体験学習を行っていた。引率者として参加し、各小学校から集まった子供たちと一緒に過ごす中でシュノーケリングやスキューバダイビングを行ったが、目の前に泳ぐ色鮮やかな魚の群れと海中の美しさは、それまで見たことのない素晴らしい光景であった。それ以来、私にとって夏になると海に出掛けることが夏休みの予定に入っている。

昨年は、モーターバイクで宜野湾の海を走ってきた。広い海を波しぶきを浴びながら進むのは、爽快である。夏休みならではのストレス解消。さて、今年は何をしようか。限られた時間の中でこの夏にしかできないことを今から熟慮中である。

編集後記

「令和」を迎え４か月がたちました。「平成」の悲しみに満ちた幕開けと比べ、笑顔と祝福の中で、新しい時代が始まったことに心温まる思いがしました。私たちも新学習指導要領全面実施という教育界の新しい幕開けに、心新たに取り組んでいきたいと思います。

さて、第49号は、定期総会や全国専門部の動き、そして滋賀県で行われました全国大会の報告を中心に編集しました。また、各地区の特色ある取組や、仲間の人間味あふれる「会員の声」にもご注目ください。

末筆ながら、御多忙用にもかかわらず寄稿いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。（秋山）